

【自由研究発表第 4 セッション 13:45-14:20】

タイのイスラーム カナ・カオとカナ・マイについての小考

柴山 信二郎
(帝京平成大学)

タイのイスラーム社会において「カナ・カオ」、「カナ・マイ」と称されるグループの摩擦・対立が指摘されて久しい。カナ・カオとは古いグループを意味し、「サーイ・カオ（古い潮流）」、「コラフ（イスラーム発祥後 300 年以降の時代）」とも称される。一方、カナ・マイは新しいグループを意味し、「サーイ・マイ（新しい潮流）」、や「サラフ（サラフィー主義）」、「スンナ（預言者ムハンマドの言行・範例）」と称されることもある。本発表では、先行研究等の二次資料に加えて、2019 年に実施した現地調査およびタイ語関連 WEB サイトからの情報に基づき、カナ・カオとカナ・マイはどのようなグループなのか、どのような事象が摩擦・対立の対象になっているのか、また、カナ・マイはどのように変遷してきたのか、について論じる。

カナ・カオはイスラーム伝統主義とも称され、非イスラーム的とも見なされることがある地域文化・慣習を実践している人々である。一方、カナ・マイの主なグループは時代により異なり、イスラーム改革主義、イスラーム復興主義から現在ではサラフィー主義へと変遷している。その動態的な一連の様子はまさに「サーイ・マイ（新しい潮流）」の呼称に表れている。

これら新旧グループ間の摩擦・対立は「どちらが正しいイスラームか」という主張のせめぎ合いである。それは思想と実践面におけるトピックごとに観察でき、また、ムスリム庶民間で観察されることもあれば、イスラーム有識者やその学徒間で観察されることもある。そして、かつては両グループ間における摩擦だったものが、SNS などの普及により摩擦は対立へと発展し、WEB 空間においては論争や一方から他方への攻撃的な言動も見られるようになった。

そもそもカナ・マイの出現がなければカナ・カオの呼称もなく、摩擦や対立も存在しない。カナ・マイのタイへの伝播は 3 つの時期にわたって観察することができる。第 1 期は 20 世紀初期から中期に見られたエジプトのアズハル改革を機に発した中東のイスラーム改革主義の影響である。第 1 期の波は際立って定着することはなかったが、その影響は現在まで続いている。第 2 期は 1980 年代前後のタブリーグ・ジャマートの広がりであり、都市部・農村部に浸透していった。第 3 期の波は 2000 年前後のサラフィー主義の台頭である。第 1 期・第 2 期ではウラマーとイスラーム書・刊行物やイスラーム組織の活動がカナ・マイ思想の伝播に貢献したとことと比較すると、第 3 期の波は SNS 等の活用により、広く急速にタイのイスラーム社会に影響を及ぼしている。また、カナ・マイのタイへの第 1 期伝播には、これまでの先行研究・言説とは異なる側面を見出すことができ、中部と深南部では異なる経路が想定できる可能性も示唆できる。

*本発表内容は、科学研究費助成事業基盤研究(C)(一般)19K00084 の助成による研究成果を反映しています。

【自由研究発表第 4 セッション 14:25-15:00】

タイ国の中国系土地神

その中間報告

片岡 樹
(京都大学)

タイ国においてもっともポピュラーな中国系の神はおそらく本頭公と呼ばれる土地神である。これは類似の性格をもつ大伯公と同様、東南アジアで独自の発展を遂げた神々である。ではそもそも本頭公とは何なのか。またその祭祀にはいかなる地域差があるのか。それを本報告では考えたい。

この点を考察するにあたっては、まず本頭公、大伯公、さらには福德正神といった神々の異同を確認しておく必要がある。これについてはかつて 1950 年代にシンガポールの『南洋学報』誌において盛んな論争が展開された。そこでのひとつの有力な説は、シンガポールなど島嶼部における大伯公と福德正神は同一の神であり、本頭公はそのタイ国における別名だということである。ただし子細に見てみると、この図式化はもう少し丁寧な補足説明を必要とする。これが本報告の主たる検討課題である。

この問題を考えるためには、バンコクを中心とする土地神祭祀（仮にバンコク型と呼ぶ）と、シンガポールなど島嶼部におけるそれ（仮にシンガポール型と呼ぶ）の異同を明らかにする必要がある。シンガポール型の場合、神像は中国の典型的土地公像（元宝銭を手にした白髭の老人）がもちいられ、神名や廟名の文語表記では大伯公と福德の双方が互換的に用いられるが、対聯では「福×××／徳×××」とする表記が卓越する。いっぽうバンコク型では、本頭公はそもそも福德正神と別の神格とみなされ、本頭公の神像には多くの場合、若年の武人像が用いられる（例外は多い）。したがって神名や廟名の文語表記も本頭公であり、対聯も「本×××」「頭×××」とする表記が一般的である。

以上の説明は、あくまでシンガポール型の大伯公／福德正神崇拝とバンコク型の本頭公崇拝をあくまで別のものとして切り離しておくかぎりは非常に明確である。しかしながら、実際には本頭公＝大伯公＝福德正神とみなす重複地域が存在する。本頭公という名称はマレーシア領のペナンにまで広がっており、本頭公を大伯公／福德正神と同一視する地域の北限はラノーンから隣接するミャンマー領にまで広がっている。この両者には含まれた地域がバンコク型、シンガポール型の重複地域だということができる。

さらに事態を複雑にしているのが、土地神としての本頭公や大伯公は、その他の神格と習合する傾向が顕著である点である。大伯公の場合はダトやトというイスラム系の（とされる）土地神と習合し、本頭公はしばしば玄天上帝、媽祖（本頭公の妻である本頭媽の場合）、寝釈迦、タイ人の武人、シヴァ神などの像をもって祀られるほか、各地におけるタイ系の土着の土地神とも習合する。さらに（大）伯公は福德正神のほか、感天大帝、南天大帝、昭帝爺、タイ系土地神などとも習合し、場合によっては本頭公とも神像を共有する。このように見てくると、タイ国とその周辺における土地神祭祀は、バンコク型、シンガポール型の理念型を両極としつつ、その中間に無数の神々が多配列的に結びつくことによって構成されていることが明らかになる。

【自由研究発表第 4 セッション 15:05-15:40】

マングローブ・科学・共産党

1930 年代のバクリウ省、マングローブ保留林から

鈴木 伸二

(近畿大学)

ジェームズ・スコットの『ゾミア』ではベトナムのマングローブ地帯が彼の言う国家なき空間の一つに挙げられている。スコットが言うようにベトナム戦争中のマングローブ地帯は解放戦線の拠点となり、国家なき空間の様相を呈していた。だが、それをもってマングローブ地帯を本質主義的にゾミアと捉えてよいのだろうか。そこで本論では 1940 年 12 月にカマウのマングローブ地帯（現在のゴック・ヒエン県）で起こったポーロ・オビ（Poulo Obi、カマウ岬の沖に位置する島で現在の Hòn Khaoi）事件を取り上げ検証する。この事件は 1940 年にインドシナ共産党が主導し、コーチシナ各地で勃発した武装蜂起（南圻蜂起）の一つとして言及されてきた。しかし、なぜマングローブ地帯で共産主義者による武装蜂起が起こったのだろうか。それは決して、マングローブ地帯が国家なき空間であったからではない。

現在のゴック・ヒエン県でコーチシナ森林部が保留林を設置したのは 1918 年だった。保留林では森林部の管理のもと 20 年間の伐採権が民間に販売されるようになった。この伐採権を取得したのは主に華人で、彼らはマングローブを木炭やカッチの原料として使用した。そしてマングローブの伐採や炭焼きの労働者として雇われたのはベトナム人だった。1920 年代に入るとマングローブ木炭はタイや香港にも輸出されるようになり、1930 年代にはコーチシナで生産される木炭のほぼ全てがマングローブとなった。

また、1930 年代にはフランス本国で石油に代わるエネルギー源として木炭の重要性が増した。フランスでは 1920 年代中頃から木炭を使ったガス化エンジンの開発が進み、1930 年代に入ると政府内に森林燃料最高評議会が設けられ、森林行政を担う水・森林中央監督局で木炭の燃焼効率に関する研究が行われるようになった。インドシナでは農畜林総監部の人事や研究が 1938 年の大統領デクレで本国に従属したものになると、ガス化エンジンの燃料としてマングローブの重要性が増し、木炭の管理体制が強化された。

一方、マングローブ保留林では 1930 年末にベトナム人労働者からなる組合が結成され、1932 年 8 月にはストライキが実施された。この直後、ストライキの主導者は共産党への入党を認められ、1935 年にはタン・アン社に党支部が設立された。ポーロ・オビ事件の実働部隊を指揮することになるカントー省出身のファム・ゴック・ヒエンはこうした中で共産黨員となっていた。

このようにポーロ・オビ事件は決してマングローブ地帯がゾミアであったから起こったのではない。ポーロ・オビ事件は諸事物の配置（agencement）、マングローブを介して異なる要素がつながることで生まれたのであり、ベトナム戦争中の「解放の森」もまた新たな要素に置き換わりながら生成された諸事物の配置だったと考えるべきだろう。